大岩広場8・50ーフクベ沢合沢点11・00ー横追沢出合12・00ー三ツ釜ノ滝上13・50ーお花畑沢上部14・25～45ー縦走路（昌沢新道）15・25～40ー赤湯温泉17・35

☆一〇月一〇日(月)　曇のち晴

朝はいそいで帰ろうと、順番を早めに食堂に入り込んで食べ、センノ沢広場の駐車場へといそぐ。大して汗をかくこともなく到着。ここで解散する。帰路は五時間。久し振りに明るいうちに帰宅。（富樫　庄一）

タイム　赤湯温泉7・00ーセンノ沢広場8・10

1827　下ノ廊下

期　日　一〇月九日(日)～一〇日(月)

参加者　藤井L　遠山　以上二名

報　告

☆一〇月九日(日)　曇ときどき雨　樺平ー雲切谷出合

魚津から富山地方鉄道で宇奈月まで行く。宇奈月からは遊園地の電車のような黒部峡谷鉄道に乗る。観光客に混じって黒部の谷に見入るが紅葉はまだ早いようだ。標高が低いのに風がいやに冷たく、樺平に着くころにはすっかり冷えてしまった。樺平から三〇分ほど急坂を登り、後はまったく傾斜のない長い退屈な道を阿曽原へ向う。燃え切らない紅葉に不満を感じながらも、スケールの大きな峡谷に感嘆させられる。対岸の奥鐘山西壁に二～三のパーティが取り付いているのが見える。志合谷は長いトンネルをランプをつけて通過する。折尾谷は六〇米ほどの立派な滝となって黒部川にそそいでいる。やっとの思いで阿曽原温泉に着いたが、この先も単調な登山道が続いている。仙人ダムで右岸に渡り、右から仙人谷を合わせる。雲切谷の出合付近は広い河原となっており、ここを今日の幕営地と決める。

（遠山　隆）

タイム　樺平9・20ー50～10・00ー11・00～11・10ー志合谷12・00ーオリオ谷12・35～40ー阿曽原13・35～55ー雲切谷出合14・45

☆一〇月一〇日(月)　曇時々晴

快適だった河原の天場を日の出前に立ち、期待の下ノ廊下ゴルジュ帯へと入る。東沢吊橋を渡り、宇宙人

の基地を過ぎると間もなくS字峡である。日電歩道よりはるか下にS字の蛇行があざやかである。淵は深く、雪でつるつるにけずられ、ヘズリはきわめて困難、泳ぐしかなさそうである。水量が非常に多く、黒四からいっぱいに放流していることが想像できる。

S字峡を過ぎると全く平凡な河原が続いている。長い河原のあと、十字峡にかかると再び谷は狭まり、再び人を寄せつけない状態となる。こういう状態が以後くり返される。すなわち平凡なところは全く潮行価値のない河原、難しいところはヘズリが不可能、泳ぐしかないということで、秋深い沢の冷たい水に潮行はやめ、ひたすら日電歩道を歩くことにした。

夢に見た十字峡との出会いはやはり一番の感激であった。本流、剣沢、棒小屋沢がぶつかりあい、ふかい緑の深淵を形成する。偶然とはいえ、自然の作った大傑作としか言いようがない。特に剣沢の入ってくる勢いはすさまじく、一五メートルのF一を豊かな水量で轟音と共に出現する様は威圧的である。冠松次郎〝黒部渓谷〟の名文がよみがえってくる。踏跡づたいに沢まで下り、しばしその情景に見とれ、感慨にひたっていた。棒小屋沢は爺ヶ岳、鹿島槍の水を集めたにしてはあまりに狭く、そして急な切れ込みであった。

十字峡をすぎると間もなく白竜峡へと入る。谷はグッと狭まり、美しい峡谷である。これで水量が豊かであればすばらしかろう。別山谷を渡り、対岸に新越沢、鳴沢を見送ると間もなく内蔵助谷出合である。この辺になると紅葉はきわめて美しく、大タテガビンや丸山の岩壁はまっ赤なナナカマドや黄色におおわれあざやかなコントラストである。

長い歩きも黒四の出現と共に終りにかかる。最後の急坂を登り切り、長い行程を終了した。下ノ廊下はすっかり開かれ、潮行のイメージには遠い。昔日の探検時代の姿はもう夢でしかないのだ。（藤井　諭）

タイム　河原6・00ーS字峡6・30ー十字峡7・15～7・55ー白竜峡8・30ー別山谷8・55ー内蔵助谷10・45ー黒四11・55

1828　氷川屏風岩（小雲取谷変更）

期　日　一〇月九日(日)　雨後曇り